

「天国を奪い取る者たち」

—マタイによる福音書講解説教 52—

マラキ書

第4篇 1節～6節

マタイによる福音書

第11章 1節～19節

説教 岡村 恒牧師

「天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている。」(12節) 主イエスは、このような激しい言い方で、私たちの救いを明らかにされました。

バプテスマのヨハネは、ヨルダン川のほとりで多くの人に洗礼を授けました。ヨハネの言葉に心を打たれた人々が、悔い改めのバプテスマを受けました。しかし繰り返し神に背き、神無しに生きようとしてしました。救い主が来て下さらなければ、方向転換だけでは、本当に神のものとして新しく生きることはできないのです。

ヨハネは、主イエスを指さして生きた人物です。牢獄の中から、どうしても主イエスについて確認したいと思いました。弟子を遣わして主イエスに尋ねさせました。「『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか。」(3節) マタイによる福音書は、その冒頭、主イエスの系図からずっと、旧約聖書の約束に光をあて、主イエスこそ救い主であることを明らかにして来ました。今朝の聖書箇所にも、イザヤ書やマラキ書から引用がなされています。主イエスは、ヨハネの弟子たちに、「盲人は見え、足なえは歩き、…死人は生きかえり」(5節)という出来事をヨハネに伝えたら良いと言われました。世界の終わり、救い主がおいでになった時に起こる事が目の前で起こっていたのです。

「あなたがたによく言うておく。女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった。」(11節)と主は言い、旧約聖書の時代が終わったことを宣言されました。これまで生まれたどんな預言者よりも、ヨハネが一番大きい存在、最後の預言者だと言われたのです。神の救いの計画が進んで、ついに登場したのがヨハネだ、と言われたのです。

旧約聖書の時代、神の民は〈律法〉を守り、神に喜ばれる人生を送ることで神の祝福を受けることができる、と考えました。しかしやがて、律法を守ることで誰一人として神の国に入ることができないことが、はっきりしました。神によって造り変えられ、新しい命を持つ者として生まれ変えられなければ、神のさばきに耐え、神の国に入ることは誰にもできないのです。

ヨハネの声を聞き、主イエスのお言葉を聞いた大勢の人たちがいました。しかし主イエスのたとえにあるように、誰も本気で聞き、信じる

ことをしませんでした。こどもたちが、一緒に遊ぼうといくら声をかけても、誰も一緒に遊ばない時があります。ヨハネの声にも、主イエスの招きにも応えず、神無しに生きることしかできない人々を目の前にして、主イエスは言われるのです。「耳のある者は聞くがよい。」(15節)

聖霊なる神が、私たちの心を開き、耳を開いて下さる時初めて、私たちは主の招きの声を聞き取ります。主イエスが、私たちのためにいったい何をして下さったのか、初めて知るようになるのです。

主イエスは、「バプテスマのヨハネの時から今に至るまで、天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている。」(12節)と言われました。旧約聖書の時代が終わりを迎えて、主イエスの到来によって始まったことは何か。どれほど手を伸ばしても届かない神の国を求めることができるようになったのです。「求めなさい」、「まず神の国と神の義とを求めなさい」と主は言われました。

主イエスが来て下さり、新しい時が来ました。「バプテスマのヨハネの時」というのは、天の門が開かれた時だ、と言われます。私たち人間が、自分の力で神の国に手を伸ばす時代は終わりました。神の国に無関係だった者が、「最も小さい者」として神の国に入れられてしまう時が来たのです。

主イエスご自身が、私たちを神の国に入れるために十字架に架かり、血を流し、その命を与え尽くして下さいました。主イエスが十字架の上で苦しまれた時間は、聖書の中でも最も激しい時間でした。神のひとり子が、もたえ苦しみ、血を流して痛みを味わい尽くす、天と地が震えるような激しい時間でした。主イエスご自身が、私たちのために激しく神の国を獲得して下さいました。だから私自身も、もっと激しく、全身全霊をかけて神の国を求めることができます。

主イエス・キリストを信じる者はひとりも滅びることがなく、永遠の命を得るのです。この約束を信じて洗礼を受けた者は、〈激しく奪う者〉の姿で、神の国を待ち望んで歩みます。信仰の戦いや試練の中で、なお神の民、神の国を目指し旅人として激しく歩みます。主イエスの命によって、確かに天の門が開かれているので、安心してこの旅を歩むのです。

(記 岡村 恒)